（総説）

# 日本の看護における「やさしさ」の文献検討

渡辺かづみ [1)]　南裕子 [2)]　山岡由実 [3)]

**要　旨**

本研究は、看護における「やさしさ」とは何か、「やさしさ」がどのように扱われているのかを系統的に明らかにすることを目的とする総説である。看護のなかで、「やさしさ」がどのように取り扱われているのかを明確にするために、対象は1973年以降の看護系論文と、初版から現在まで揃っている看護系教科書とし、「やさしさ」について記述している箇所を抽出し、質的帰納的に分析した。文献では、看護師に対する役割期待としての「やさしさ」、看護における「やさしさ」概念の性質、看護実践としての「やさしさ」の構成要素、患者からみた看護実践としての「やさしさ」が述べられていた。看護系教科書では、「やさしさ」について触れられてはいるものの、定義や具体的な内容の説明はなかった。本研究で「やさしさ」が明確になっていないことがわかり、今後は「やさしさ」について研究を進め、実践や教育への活用が望まれる。

**キーワード ： やさしさ　看護　文献検討　総説**

## Ⅰ．はじめに

看護における「やさしさ」に目を向けると、Florence Nightingaleは著書「看護婦の訓練と病人の看護」の中でシェークスピアを引用しながら、「やさしさ」に該当する語としてkind, tenderを用い、「やさしさ」について以下の様に述べている。

「看護婦について最も優れた定義は、よく引用されるのであるが、シェークスピアの言葉の中にある。すなわち彼（シェークスピア）は「看護婦らしさ〔nurse-like〕」とはこのようなことだと言っている。

*これほど親切、忠実な、勤勉な、患者の望むことに対してやさしく、真実な、そして手際のよい*

*(So kind, so duteous, delighted, So tender over his occasions, true, So feat)（中略）*

看護婦はたしかに患者の「要求に対してやさしい思いやり」（Tender over his occasions）をもたねばならない。（中略）看護婦は常に親切でおもいやりがなければならないが決して感情に走ってはならない。（The nurse must always be kind and sympathetic, but never emotional）」[1) 2)]

Nightingaleは、看護における「やさしさ」が大切だといっているが、看護師の感情的ではない「やさしさ」の必要性を述べており、また石垣・石谷は「医療の本質はやさしさにある」[3) 4)]と述べている。一般の人々に看護職に望むものはと問うと「やさしさ」という答えが圧倒的に多く[5)]、さらに、患者が看護師に求めているものの一つとして「やさしさ」があり[6)]、「やさしさ」重要な概念だと考えられるが十分に明らかになっていない。

さらに「やさしさ」は、時代とともに変化している。竹内[7)]や広辞苑（第1版～第7版[8)～14)]）によると、古代・中古では「やさしさ」は、“身もやせ細るほど恥ずかしい”という意味であった。それが時代や社会の変化に伴い、「やさしさ」も、“情け深い”や“思いやり”という意味を持つように変化した。しかし、看護における「やさしさ」がどのように変化しているのかも明らかになっていない。

そこで看護における「やさしさ」とは何か、「やさしさ」がどのように扱われているのか系統的に明らかにしたいと考え、本研究に取り組んだ。本研究は、「やさしい」と表現される看護実践やその教育への一

受付日：2023年6月9日　　受理日：2023年8月9日
1）山梨県立大学　2）兵庫県立大学名誉教授、神戸市看護大学名誉教授　3）大阪医科薬科大学

助となると考える。

## Ⅱ．研究方法

### 1. 対象文献

看護のなかで「やさしさ」の概念がどのように取り扱われているのかを明確にするために、対象は、看護系論文と看護系教科書とし、看護にとっての「やさしさ」について述べられているものを抽出した。

1）看護系論文

国内の「やさしさ」に関連する看護系の論文を、日本看護関係文献集の第1巻から最終の第29巻までと、医中誌 Web で検索した。また、それに加え学術的に重要と思われる国内の看護系の学位論文をオンラインで検索し、可能な範囲で所蔵図書館にて閲覧した。

日本看護関係文献集は、①文献のタイトルに「やさしさ」が入っている、②看護師患者関係の論文で内容に「やさしさ」についてふれられている、③ニード調査の結果「やさしさ」が入っている、のいずれかを条件として検索した。

医中誌は、検索語を「やさしさ」とし、本文あり、論文種類において会議録を除き、分類を看護として検索した。座談会の記事は論文ではないため対象から除外し、論文に示されている研究の目的と意義をみて、看護にとっての「やさしさ」について述べられているものを抽出した。

2）看護系教科書

基礎看護教育は、国家試験受験資格との関係から保健師助産師看護師法養成所指定規則（以下保助看法養成所指定規則と略す）が基本となる。保助看法養成所指定規則が1951（昭和26）年に制定され、看護系教科書が出版されるようになった。1950年代から看護系教科書を出版し、アクセスできたのは医学書院とメヂカルフレンド社であった。そのため2社を訪ね看護系教科書を閲覧したところ、初版から現在まですべてが所蔵され調べることができたのは、医学書院だけであった。そのため医学書院の看護系教科書を対象とした。以後【　】はシリーズ名、＜　＞科目名、『　』は書名とする。

医学書院の教科書は、保助看法養成所指定規則が1951（昭和26）年に制定された翌年の1952年に【高等看護学講座】としてシリーズの初版が出版された。その中で看護の原理・概論に関する教科書は、＜看護原理＞と＜看護倫理・看護史＞であった（＜看護倫理・看護史＞は、1961年第6版より、＜看護倫理＞として独立した書籍となった）。1967（昭和42）年に、保助看法養成所指定規則の第一次改正があり、カリキュラムが医学の枠組みから看護学の枠組みへ転換され、この改正に伴い＜看護学総論＞が科目として保助看法養成所指定規則に明示された。第一次改正の翌年1968（昭和43）年に医学書院の【高等看護学講座】は【系統看護学講座】に移行され、【系統看護学講座】に移行したことに伴い＜看護倫理＞としての独立した本はなくなった。1989（平成元）年保助看法養成所指定規則の第二次改正があり、＜看護学総論＞は＜基礎看護学＞と改められた。医学書院の【系統看護学講座】の＜看護学総論＞も＜基礎看護学＞となり、＜基礎看護学＞は『看護学概論』『基礎看護技術』『臨床看護総論』の3科目から構成されることになった。本研究では、原理・概念に関する科目である【高等看護学講座】の＜看護原理＞と＜看護倫理・看護史＞、【系統看護学講座】の＜基礎看護学＞のうち、原理・概念に関する科目である『看護学概論』『臨床看護総論』を対象とした。

### 2. 分析方法

対象文献の全てのページを見て、「やさしさ」「やさしい」「やさしく」など、語幹が「やさし」の言葉が用いられている文章の記載を意味のまとまりごと全て抽出し、その「やさしさ」が何について書かれているのか、どのように述べられているのかということについて、類似性と相違性の視点で帰納的に分析するとともに、3人の研究者間で比較検討し、整合性を確認しまとめた。

## Ⅲ．結果

### 1. 看護系論文における「やさしさ」

日本看護関係文献集では条件に該当した論文は、6件であった。医中誌 Web の検索では、23件ヒットした。「やさし」という用語はあるが、内容について述べられていない文献を除いた11件を対象とした。国内の看護系学位論文は、3件の文献が「やさしさ」に関連する内容を述べていたため、文献分析の対象とした。以上合計20文献を分析対象とした。

「やさしい」という言葉が、何についてどのように述べられているのかの内容を抽出し帰納的に分析した結果、看護師に対する役割期待としての「やさしさ」、看護における「やさしさ」概念の性質、看護師・看護学生からみた看護実践としての「やさしさ」の

構成要素、患者からみた看護実践としての「やさしさ」に分けられた。

対象文献に、看護師ではなく、名称変更前の看護婦と記載されていたものに関しては、文献の表記を尊重し、そのまま記述した。

1）看護師に対する役割期待としての「やさしさ」

看護師に対する役割期待としての「やさしさ」の報告は、1980年代から始まり、2000年代に入っても続いていた。「やさしさ」は、看護師に対する役割期待として上位を占め、患者や産婦を対象とした報告から、次第に家族や外国籍の医療利用者に拡大された。また看護学生も看護師に必要な態度として「やさしさ」を挙げていた。

安原・鶴田[15]は、産婦のニードについて1080人を対象にアンケート調査をおこなっている。病院サービスについて満足だった内容を自由記述で書いてもらったところ、病院サービスを全体としてとらえた表現より、看護師からうけたサービスに焦点があてたものが多かったという。助産師や看護師に望むことについて自由記述方式の結果は、2位にやさしい態度（22.9%）、3位に指導を丁寧にやさしく（9.8%）、5位にやさしい言葉づかい（6.3%）であったと報告しており、産婦の助産師や看護師への望みは、「やさしさ」が上位を占めていることが示された。

井部[16]は、成人の男女40名（平均年齢54.2歳）を対象に面接調査を実施し、入院患者の看護に対する役割期待を調べた。その結果、親切が1位で、やさしいが2位であった。しかし患者のいう「やさしさ」について深く聞いてはいない。

鶴田[17]は、成人男性の入院患者30例（平均年齢56.2歳）に半構成的面接法を用いて患者の看護師への期待の構造を研究し、その結果、期待することの4番目として「やさしさ」があり、その内容を、「ふれあい型」と「情け型」があると分類した。

倉林[18]は、家族との死別を体験した23名に対しアンケート調査を実施し、闘病時に家族がよい看護師と判断したひとつとして「やさしさ」を挙げている。

また田邉ら[19]は、小児がんの子どもを持つ母親8名にインタビューし、療養体験を意味づけるプロセスを明らかにした。その結果、母親が前向きになる力として、＜支えてくれる人々のやさしさ＞があり、意味づけの獲得として＜人々のやさしさの再認識＞が抽出されたと報告している。これらの結果は、患者だけでなく家族にとっても「やさしさ」は、重要な意味をもつことを示唆している。

糸井[20]は、在日カンボディア人の8名を主要情報提供者と、18名の一般情報提供者から、インタビューとレイニンガーの観察法を参考に、伝統的な健康実践と援助関係へのニーズを明らかにした。ニーズのひとつとして、医療者の行為に「やさしさ」を求め、医療者に対して「まかせる」態度をもつ特徴が抽出されたと報告しており、国籍にかかわらず医療者に「やさしさ」が求められていることが示された。

大澤ら[21]や横山らは[22]は、看護学生の39名ならびに86名を対象としたアンケート調査の結果から、看護学生は看護師の必要な態度として「やさしさ」を挙げていると報告している。

2）看護における「やさしさ」概念の性質

看護における「やさしさ」概念の性質について述べている論文は、日本の「やさしさ」の特徴として、他律性や厳しさを伴わない盲目的な保護が挙げられ、厳しさを伴わない「やさしさ」は、患者の自立を奪うことになり、厳しさを伴う「やさしさ」の必要性が論じられていた。また、「やさしさ」について必ずしも肯定的に捉えていない意見も認められた。

吉武[23]は、「厳しさの伴わぬやさしさは、実は患者の自立を奪う単なる甘やかしに過ぎない」とし、アメリカと比較し厳しさの伴わない「やさしさ」が日本の看護婦に多いとも指摘している。「一人のナースの受け持つ患者の数が少なければ少ないほど、患者が時間をかけて行動することを容認するゆとりを持つことができる。」とゆとりの必要性を説いている。

中西[24]は、日本的優しさの根本原理として、対決回避に基づく他律性と盲目的な保護をあげ、日本的優しさの要素として、共感的理解、扱いやすさ（controllability）、代行意思決定があるとしている。この3つの要素をもつ日本的優しさには、3つの要素ゆえの落とし穴があると指摘している、その落とし穴とは、心情優位のアプローチに陥りやすかったり、相手のいいなりになり患者、看護師双方にとっての成長に役立たなかったり、自律性の否定等である。これらの日本的優しさとは異なる普遍的優しさには、自立とか自律が重要であり、個の確立が必要だと指摘している。

亀山[25]は、「現代人のいう「やさしさ」とは「思いやり」などであるという時、自分に対する一方的な「思いやり」を求めているのではないか。すなわち、甘えに終始しているだけではないか。」そしてこのことは「患者が自立を失うことになる」と指摘している。しかし元来の「やさしさ」は、厳しさも伴っていた

といっており、厳しさの伴わない「やさしさ」は、女性を不幸な状態にしていると指摘している。看護師は、厳しさを伴った「やさしさ」を持つことが重要だといっている。

土屋[26]は、医師や看護師の関わりを振り返り、相手のためを思ってという「やさしさ」は、必ずしも相手のためになるとは限らない、時に相手に葛藤を生じさせることがあると指摘しており注意が必要だと指摘している。

佐々木[27]は、子どもと家族のQOLを高めることに配慮しながら実践することが大切であり、相手に求める、または相手に与える「やさしさ」はエゴであり、真の「やさしさ」にはエゴがないと述べているが、真の「やさしさ」とは何かについては述べられていない。

3）看護師・看護学生からみた看護実践としての「やさしさ」の構成要素

看護師・看護学生からみた看護実践としての「やさしさ」の構成要素について、橋本、豊島、大谷らの報告が認められた。

橋本[28][29]は、看護婦120名・看護学生175名を対象に「やさしさ」について質問紙を用いて調査している。その結果、「やさしさ」は、3つの発展段階と3つの構成要素からなると報告している。3つの発展段階の第1段階は、「受け身的で素人的な形のやさしさ」、第2段階は「共振れ的で素人的な形と専門的内容が混在しているやさしさ」、第3段階は「主体的でわかりやすい専門的内容のやさしさ」であり、構成要素として見いだされたものは、「主体性」「自分・相手」「形・内容」であった。「主体性」とは、看護師に活動が受け身的か、共振的か、主体的かをいい、「自分・相手」では看護師・患者間の距離をいい、「形・内容」は、知識・技術が素人的か専門的かをいっている。またそれぞれの構成要素は、段階をふむとしている。一般的な「やさしさ」と看護師の考えている「やさしさ」を比較し、看護師の「やさしさ」には「専門的知識」「厳しさ」が含まれている点が異なると指摘している。また、「ゆとり」がないと看護師の「やさしさ」援助の表現になりにくいと看護師は考えていると報告しており、このことは吉武の指摘と一致している。

豊島[30]らは、看護師を対象として「やさしさ」の捉えと意識について、橋本らの先行研究で示した、やさしさの3つの軸（専門性、主体性、距離）をもとに、3施設の看護師81名にとったアンケート調査から勤務年数との関連を報告している。勤務経験年数が増すにつれ、自分と相手との距離間が適度となり、主体性は受け身的から主体的に変化し、形・内容が専門的に変化したと報告している。つまり看護師の「やさしさ」は、経験を積むに従い変化していることを示している。

大谷ら[31]は、看護学生83名を対象として看護学生が考える「やさしさ」をアンケート調査し、「やさしさ」の概念を＜気持ち理解型＞＜ニーズ充足型＞＜真のやさしさ志向型＞＜倫理重視型＞＜受け手判断型＞＜言動重視型＞＜情緒反応型＞の7つの分類ができたと報告している。その分類結果をもとに大谷ら[32]は、看護学生73名に1年次と3年次に調査し「やさしさ」についての認識の変化を報告している。相手の立場や気持ちを理解する＜気持ち理解型やさしさ＞は、1年生3年生ともに4割を超えていたが、1年生は相手が必要とすることに手を貸す＜ニーズ充足型やさしさ＞が20％と多かったが、3年生になると相手のことを考え、必要があれば厳しい対応もできる＜真のやさしさ志向型やさしさ＞が28％と経験によって変化したことを報告しており、経験が「やさしさ」の認識について影響していることを示しており、豊島らの報告と一致している。

以上「やさしさ」の構造として、興味深い構成要素や学年に拠る相違が報告されている。しかし「やさしさ」の構成要素のなかに「真のやさしさ」というように「やさしさ」という用語を含めて書かれているので、「やさしさ」の内容に関する研究についてはさらに深める必要があろう。

4）患者からみた看護実践としての「やさしさ」

笠松、山屋らは、患者からみた看護実践としての「やさしさ」の報告をしていた。

笠松[33]は、9名の患者にインタビューし、グラウンデッドセオリーアプローチで分析した結果、患者が認知する看護実践の「やさしさ」について報告している。患者は、看護師から受けた看護で「一人の人間として患者に関心をもち心を通わせる」「自分本位でなく患者のために懸命になる」「不安の原因に働きかけ安心できるようにする」などを患者は「やさしさ」と認知していた。笠松は、これらは看護師の心情を基盤としたプロセスであり、学生時代から継続して学習し会得した知識や技術が用いられると報告している。さらに興味深いことは、患者が感じた「やさしさ」を実践した看護師にインタビューしているが、看護師は「やさし」くしたと認識していなかっ

たことである。

山屋ら[34]は、16名の患者に「やさしさと思いやり」についてのアンケート調査を実施しKJ法で分析した結果を報告している。患者が「やさしさと思いやり」を感じたこととして患者の満足感につながる言葉や清潔行為を手助けする場面などがあったと報告しているが、「やさしさ」と思いやりをセットとして聞いており「やさしさ」に特化した内容は述べられていない。

**2. 看護系教科書における「やさしさ」**

「やさしさ」についての表記は、【高等看護学講座】の初版（1952年）からみられている。【高等看護学講座】の一冊である＜看護倫理・看護史＞の書籍があるが、「やさしい親切のこもった言葉は患者の心を引き立てる」[35]とあり、ここで使われているやさしさの意味は、言葉のトーンがソフトであるという意味であり、【高等看護学講座】では親切とやさしさは区別され用いられている。その後も前述のような「やさしさ」の表記は、【高等看護学講座】＜看護倫理＞の最終版である第7版（1964年）まで続いていたが、【系統看護学講座】に移行したことに伴い＜看護倫理＞としての独立した本はなくなっている。【高等看護学講座】の＜看護原理＞で患者の性格として23の内容が挙げられており、その中のひとつに「優しい性格」と患者の性格として「優しい」が記されている。これは、第1版（1957年）から第4版（1961年）まで継続していたが、第5版（1964年）に患者の性格の記載がなくなり、「やさしさ」の表記もなくなった。

【系統看護学講座】＜看護学総論＞の第1版（1968年）から第3版（1971年）までの間、「やさしさ」の表記は消失している。その代わりに、ヘンダーソンやアブデラらの看護理論が新たに採用されていることが注目される。

「やさしさ」は、【系統看護学講座】＜看護学総論＞第4版（1975年）の心理的援助の中で「やさしくほほえみかける」[36]という表記で復活しているが、「やさしさ」についてそれ以上の踏み込んだ記述はみられていない。

『看護学概論』は、看護の本質や、看護の役割と機能、看護の対象の理解といった内容が記されており、“看護とは”について概説している。

【系統看護学講座】＜基礎看護学＞の『臨床看護総論』の第4版の心理的援助の項目で「やさしくほほえみかける」の表記は、『看護学概論』でも継続し、第13版(2001年)まで続いた[37]。しかし第14版(2006年）では、心理的援助の項目が『看護学概論』からなくなり、「やさしさ」の表記が消失した。第14版の“はしがき”に、改定の意図として現代看護に重点をおいたと著者が述べている[38]。

保助看法養成所指定規則の第四次改正が2008（平成20）年にされ、4年後の2012（平成24）年に『看護学概論』第15版が出版された。2012年は、2011年東北地方太平洋沖地震が発生した翌年であり、第1章「看護とは」のA看護の本質で、「看護師は、やさしくほほえみかけてくれたり明るくふるまったりして、元気を与えてくれる存在」[39]と「やさしさ」の表記が復活した。著者は、“はしがき”で、東北地方太平洋沖地震について触れており、「看護は生と死という人の一生のなかで最も重要な局面に立ち会う職業であり、人に生きていく力を与えてくれるのは、人と人とのふれあいであり、支え合いであり、また自分のこころのよりどころを見いだすこと」[40]だと記している。

第16版（2016年）では[41]、第15版と変わらず、第1章の「看護とは」のA看護の本質で、「看護師は、やさしくほほえみかけてくれたり明るくふるまったりして、元気を与えてくれる存在」と表記されている。

第17版（2020年）では、“序章看護を学ぶにあたって”が新たに加わり、＜A看護師とはなにをする職業なのだろうか＞のなかで、看護師のイメージとして「ほほえみながらやさしい言葉をかける」[42]という表記が認められる。同じ序章のなかで、＜ナイチンゲールの実践に見る看護師の知識と判断力＞の項目に、「傷病兵という弱い者に多する深い愛，人間的やさしさが、その原動力であったことは間違いない。しかし、それだけでは看護師本来の役割を果たすことはできない。ナイチンゲールは、厳しい状況のなかにあっても、それまで身につけた教養と知識・想像力・洞察力・判断力を駆使し、苦境をのりきって傷病者への看護を実践したのである。「白衣の天使」の真の姿は、単に「やさしい人」ではなかったのだ。」[43]とナイチンゲールを知識と判断力を備えた「やさしい人」と述べている。

【系統看護学講座】の『臨床看護総論』は、1989（平成元）年の保助看法養成所指定規則の改正に伴い出版された。「基礎看護学」を構成する3科目の一つであり、科目で学習した知識・技術を、「健康上のニーズをもったあらゆる年齢層の対象に統合して応用する実践能力を習得する」[44]ことを期待された。

この第1版（1990年）から第2版（1993年）の中で、

「やさしさ」は、まず「経過に基づく患者の看護のICU･CCUに入院した患者への援助の内容の一つ「安心感を与えることば」（第1版）あるいは「安心感を与える態度」（第2版）の中で、看護者の態度を表す言葉として記述されていた。具体的には、「急性期の重症患者の中には一般病棟の個室に収容され、（中略）ICU／CCU病棟の患者に非常に類似した状況に置かれることもある。そのような患者に対しても、器械に囲まれているという環境や緊張感を少しでも補う気持ちをもち、患者と目を合わせ（アイーコンタクト）ことばをかける、やさしい態度で接することが何より必要となる。」[45) 46)] という記載である。しかし、第3版（1997年）では、急性期の経過に基づく患者の看護の中から、「ICU・CCUに入院した患者への援助」という項目そのものが削除されている。そして「重症患者のニーズ」という項目の中では、「看護師の細心の注意と看護が必要」[47)] という記載のみとなり、「やさしさ」という記述は関連する内容からも見当たらなくなった。

その他に「やさしさ」という記述があったのは、第2版（1993年）、第3版（1997年）、第4版（2006年）の主要症状を示す患者の看護の中の「痛みの意味をさぐる」という項目であった。具体的には「痛みの意味をさぐることは個別ケアにつながる。個別ケアを受けた患者は、看護婦の心くばりに気づき、看護婦が信頼に足る人物であると確信できるようになる」[48) 49) 50)]、ということを表現する具体的な例として、前田の著書[51)] を引用し、「両腕の手首、肘がこの日は最悪で、久方ぶりの検診で清水先生は私の腕に触れる。関節の状態を診るためなのだが、あまりの痛さと悲しみが同時に私を襲い、心ならずも涙があふれる。いつものやさしい看護婦さんがそばからティッシュペーパーをさし出してくれる。」[52) 53) 54)] という記述である。「痛みの意味をさぐる」という看護活動に「やさしさ」を用いるのではなく、患者からみた看護師像として表現されていた。

しかし、【系統看護学講座】の＜臨床看護総論＞は、発行から20年を過ぎた第5版（2012年）で、それまでの内容の見直しと精選を行い、著者メンバーも大きく変わっており、この前田の著書の引用もなくなっている。

第5版（2012）以降での「やさしさ」は、新たな著者メンバーにより「健康状態の経過に基づく看護の中の、「患者の気持ちを受け止める」という看護援助の内容の記述の一部にとどまっている。具体的には、「回復への期待を持っている時期もわずかな変化に一喜一憂するため、望みを捨てきれない気持ちを理解してやさしく接する必要がある」[55) 56)] という記載である。第6版（2016年）も、少し表現の微修正はありながらも同じ記載がある。ただし、見出しとしては、新たに「心理･社会的な援助」という項目を立て、その内容の一部としての同記載である。

なお、第7版（2022年）では、「健康状態の経過に基づく看護」の中の「D.リハビリテーション期における看護」項目そのものが「D.回復期における看護」となった。第5版（2012年）、第6版（2016年）の内容としては、「障害の受容過程への支援」[57)] に入ると思われたが、著者が変わり、内容にも「やさしさ」の記述は見あたらなかった。

## Ⅳ．考察

「優しい」や「やさしさ」など「やさし」という用語は日本では日常的によく使われており、それに関する研究や観察に基づく出版がされている[58) 59) 60)]。「やさし」という日本語は広辞苑にあるように人の佇まいや対人関係の有り様を表す特徴的な用語である。対人関係を重視する看護にとっては、重要な看護の概念である筈である。近代看護の創始者であるNightingaleが「*tender over his occasions*」と表現し「要求に対してやさしい思いやり」と訳された言葉は、日本ではどのような発展を遂げたのであろうか。それがこの研究の根底の疑問であった。

看護学系論文や教科書の文献検討をした結果、気がついた教育者や研究者が重要な知見や考え方を呈示してきたことが明らかになったが、それが教育や研究の主流になりきれてないと考える。文献で得た知見を考察し、今後の課題について整理した。

### 1．看護にとっての「やさしさ」

看護系論文においても、看護系教科書においても、経年的にみると断続的だがコンスタントに「やさしさ」は扱われている。入院や病む経験をした患者や家族を対象にした研究の分析から、「やさしさ」は対象者が重視することの上位に絶えずあることがわかった。なぜ「やさしさ」が病む人や家族、産婦にとって重要なのかは研究に含まれていないが、看護学系外の文献では、病む経験と「やさしさ」の関係とその意味を述べたものがある。例えば、柳澤[61)] は、自らの難病による闘病生活を振り返り、「ひとびとの優しさに触れ、心豊かな時間を過ごし、人間として生

まれた喜びをかみしめられることは、この世で最高の幸せであろう。（中略）ほんとうの優しさに包まれて、癒しとは何かということを経験した。」と述べているように、「やさしさ」は人を癒す力を持つことが示唆されている。

また小児医療を専門とする仁志田[62]は、「やさしさ」を中心としたケアで養育された児は、ストレスの多いケアを受けた児と比較すると前頭葉の発達に差が見られると指摘している。ストレスを過剰に加えられた児の前頭葉の発達が悪くなるのは、優しさに関係するセロトニン受容体を擁する細胞がストレスにより減少するためであると考えられていると述べている。さらに仁志田[63]は、ストレスを受ける毎に「やさしさ」に関与する細胞が失われること、そのためにストレスを受けやすい超低出生体重児では、成長した時に相手の心を読み取る能力に欠陥が生じるなど高次脳機能障害が生じやすいと指摘している。「やさしさ」は、人を癒やす力を持っているだけでなく、脳の発達にも影響する重要な役割を持っていることがわかる。このことは「やさしさ」の研究が主観だけではなく生理 / 生物学的な研究が必要であることを示している。

看護の「やさしさ」の概念と特徴として、厳しい「やさしさ」の必要性が複数の文献で指摘されていることに注目したい。この考え方は、患者が求めている「やさしさ」や、広辞苑における「やさしさ」にはみられない見解である。榎本[64]は、日本の文化は間柄の文化だと述べており、日本人特有の「やさしさ」が存在すると述べているが、相手を否定しない「やさしさ」などであり、その中には厳しい「やさしさ」は含まれていない。「やさしさ」の類義概念として“ケアリング”がある。“ケアリング”は、相手をケアすることで、相手の成長を援助することによって、自分もまた自己実現する結果になること（Mayeroff, M.）[65]と定義されており、ケアリングの構成要素として相手に寄り添うことが挙げられている。一方、優しいという漢字は、憂いている人の横にいるという成り立ちであり、寄り添うということでは、類似している。しかし、ケアリングは他者を成長させるという肯定的な意味だけを持つのに対し、「やさしさ」は、榎本が指摘するように、厳しさを含んだ人の成長に繋がる「やさしさ」と、傷つかないように過保護に接し人をひ弱にするという「やさしさ」という両義性を持つ点が異なっている[66]。看護職者が、看護の「やさしさ」に厳しさを求めるのは、過保護にすることで人の回復を阻害することを懸念し、成長に繋がる厳しい「やさしさ」に価値をおいている可能性がある。看護が専門職であることから、専門性に基づく厳しさのある「やさしさ」の考え方の妥当性は、研究を通して概念的に検証する必要があると考える。

**2.「やさしさ」の構成要素**

橋本らや豊島らは、看護提供者（看護師と看護学生）からみた調査研究を行い、「やさしさ」には、専門性、主体性、距離の３つの軸があり、経験年数との関係があることを指摘していた。また、それぞれの構成要素は、段階があることを指摘しており、「やさしさ」は、いろいろな在り方があることがわかった。また、一方、看護学生を対象に調査を行った大谷らは「やさしさ」について類似した構成要素を抽出しているが、学年による相違を専門性の習得と経験の成果として見ている。彼らの研究では、看護学の専門性が深まるにつれて「やさしさ」のアプローチが変化するということが示唆されているが、このことを今後さらに検証する必要があろう。

また、橋本らの調査から「やさしさ」の提供は働く環境に「ゆとり」が必要であることが示唆されたが、このことも今後検証する必要があると考える。

大谷らの研究では、看護学生が考える「やさしさ」として＜気持ち理解型＞＜ニーズ充足型＞があると報告し、笠松は患者が認知した「やさしさ」として、不安の原因に働きかけ安心できるようにすることがあると報告しており、一部共通性が見受けられるが、患者からみた「やさしさ」と看護師が考える「やさしさ」は一致しているのか、していないのか明らかになっていないということがわかった。研究方法は主にアンケート調査が多く、患者と看護師を同時に聞いている研究は少ない。今後は、参加観察法を取り入れ、患者・看護師に同時に調査し検討していく必要があるのではないか。

さらに「やさしさ」は時代の変化に伴い変化するといわれている[67][68]が、看護の「やさしさ」は、時代の変化に伴い、変わるものか変わらないものかも今回の研究では明らかにすることができなかった。仮に看護の「やさしさ」の現象が時代的変化をするものであれば、年代の異なる患者と看護師の間の認識の違いが生じる可能性があり、良いと思って実践したことが、対象にとって良いと受け取られない場合があると考える。今後明らかにすべき重要な課題といえる。

### 3．看護系教科書における「やさしさ」

看護系教科書において「やさしさ」の定義は認められなかった。また、「やさしさ」は、看護倫理のなかで、「やさしい親切のこもった言葉」などと看護師の言動として扱われていたが、【系統看護学講座】＜看護学総論＞の第1版（1968年）から第3版（1971年）までの間、「やさしさ」の表記は消失していた。その代わりに、ヘンダーソンやアブデラらの看護理論が新たに採用されていることが注目される。ヘンダーソンやアブデラらは、自立への援助について述べていることから、「やさしさ」の表記がなくなったことは、看護の専門性が協調されたことと関連があるのかもしれない。「やさしさ」は、看護の専門性や科学性の否定に繋がるのではないかという危惧から、看護師の素質の問題としてしか扱われなかったのではないかと考えられる。さらに、病院では安全・安心の療養生活といわれながらも、安全に重きがおかれ、かつ入院日数の短縮化に伴い、癒しの効果がある「やさしさ」に対しての優先順位が低くなっているのではないか。社会の変化に伴い、看護の地域への役割拡大は始まっており、地域において看護職者は、どのように生き、どう死んでいくかに関わることになり、「やさしさ」が重要な要素の一つになることが予想される。

看護系教科書において「やさしさ」の表記が復活した1975年と、大平[69]や栗原[70]が述べている「やさしさ」が社会的に変化したと指摘している年代とが一致している点が注目に値する。また、再度復活した2012年の「やさしさ」についての表記は、東北地方太平洋沖地震の翌年であった。このことから、看護系教科書における「やさしさ」も社会情勢の影響を受けているといえる。「やさしさ」が看護系教科書に再度表記されたのは、看護において「やさしさ」がコアとなる概念として再認識されたのではないか。これは時代の中で求められているためだと考えられるが、何をどうしたら、求められる「やさしさ」、真の「やさしさ」の看護実践ができるのか明らかになっていない。今後明確にしていく必要性が文献検討の結果から明らかになった。

## 結論

役割期待、概念の性質、構造から「やさしさ」は、看護師にとって大切な概念の一つであるが、看護の「やさしさ」は、厳しさも含まれており、一般の「やさしさ」と異なっている部分もあること、「やさしさ」にはいろいろな構成要素があるが、研究により内容が異なっており統一されたものはないこと、構成要素は段階があり経験年数と関連があること、やさしくするには、ゆとりが必要であるということが明らかになった。看護系教科書では、「やさしさ」の必要性の表記はあっても定義や具体的な内容の説明はなく、最初は＜看護倫理・看護史＞で取り上げられており、「やさしさ」の表記がない時代もあったことがわかった。本研究で「やさしさ」が明確になっていないことがわかり、そのため実践や教育への活用が難しいといえる。今後は「やさしさ」について研究を進め、実践や教育への活用が望まれる。

## Ⅴ．研究の限界と今後の研究への示唆

本研究では、看護系教科書を初版から現在まですべてが所蔵され調べることができた医学書院の原理・概念に関する書籍を対象としたが、基礎看護学以外の他の領域の書籍や他の出版社の書籍は閲覧していない。従って今回の文献検討により明らかとなった内容は、全体を示しているとは限らない。

今後の研究への示唆としては、考察で述べた今後の研究課題を探求するためにインタビューや参加観察法を含める多様な研究方法を用いて、多角的に臨床での「やさしさ」の概念や構成要素について探求していく必要があると考える。さらに「やさしさ」の概念開発をすることで、専門職としての看護における対人的技能として発展させることができるのではないか。

## Ⅵ．おわりに

ドイツのメルケル元首相[71]は、2020年12月31日COVID-19感染症対策についての新年に向けたテレビ演説において、COVITD-19により親愛や友情を表す手段が変化しており、今までは人と会うことが親愛や友情を示す手段であったのが、COVID-19により人との距離を保つことが思いやりの行動であると話している。「やさしさ」という表現ではなかったが、時代や社会情勢により概念というものは、変化していくと考えられる。「やさしさ」についても今後はその変化をとらえていく必要があると考える。

## 謝辞

本研究のデータ収集において、医学書院に多大なるご協力を得たことに、心から感謝いたします。

本研究において開示すべきCOIはありません。

**【文献】**

引用文献


1）ナイチンゲール著作集第２巻：看護婦の訓練と病人の看護 , 現代社 , 122, 1974.

2）Florence Nightingale ,Training of Nursing the Sick, 原文看護選集 2, 現代社 ,84-85, 1974.

3）石垣靖子 , 石谷邦彦 : 看護と倫理　尊厳を護るケアの担い手として（第１回）医療の本質はやさしさにある　東札幌病院が築いた人間尊重の医療（前編）（座談会）, 看護管理 , 30:1, 1-6, 2020.

4）石垣靖子 , 石谷邦彦 : 看護と倫理　尊厳を護るケアの担い手として（第２回）医療の本質はやさしさにある 東札幌病院が築いた人間尊重の医療（後編）（座談会）, 看護管理 , 30:2, 97-101,2020.

5）内閣府：看護に関する世論調査　1993 年 2023 年 5 月 31 日閲覧 https://survey.gov- online.go.jp/h04/H05-01-04-16.html

6）井部俊子：看護婦への役割期待 , 聖路加看護大学大学院看護学研究科修士論文 ,37, 1982.

7）竹内整一 :「やさしさ」と日本人　日本精神史入門，ちくま学芸文庫，2016，東京.

8）新村出編 , 広辞苑第 1 版 , 岩波書店 , 2135, 1955, 東京.

9）新村出編 , 広辞苑第 2 版 , 岩波書店 , 2218, 1969, 東京.

10）新村出編 , 広辞苑第 3 版 , 岩波書店 , 2404, 1983, 東京.

11）新村出編 , 広辞苑第 4 版 , 岩波書店 , 2572, 1991, 東京.

12）新村出編 , 広辞苑第 5 版 , 岩波書店 , 2678, 1998, 東京.

13）新村出編 , 広辞苑第 6 版 , 岩波書店 , 2822, 2008, 東京.

14）新村出編 , 広辞苑第 7 版 , 岩波書店 , 2946, 2018, 東京.

15）安原紀美子 , 鶴田薫：日本看護協会調査報告 No.15　施設における母子看護調査 , 日本看護協会 , 31-41, 1981.

16）井部俊子：看護婦への役割期待 , 聖路加看護大学大学院看護学研究科修士論文 ,37, 1982.

17）鶴田恵子 : 患者の持つ看護婦への期待の構造 , 聖路加看護大学大学院看護学研究科修士論文 , 69-73, 1991.

18）倉林しのぶ :「よい」という概念の探求　死別を体験した患者家族にとっての「よい看護師」とは , 日本看護倫理学会誌 , 2:1, 23-29, 2010.

19）田邊美佐子 , 神田 清子 : 造血幹細胞移植を受けた子どもを持つ母親が療養体験を意味づけるプロセス , 日本看護研究学会雑誌 , 33:2, 23-33, 2010.

20）糸井裕子 : 在日カンボディア人の伝統的な健康実践と援助関係へのニーズ , 日本看護医療学会雑誌 , 9:1, 8-17, 2007.

21）大澤早苗 , 内山久美 , 横山孝子 : 看護における職業的社会化と学生の意識　2 年課程修了前の「看護者に必要な姿勢・態度」調査から , 保健科学研究誌 , vol.2, 69-78,2005.

22）横山孝子，内山久美，大澤早苗 :「看護者に必要な姿勢・態度」に関する学生の意識　－ 4 年課程 1 年次における基礎看護学実習 I 終了後の調査から－ , 保健科学研究誌 , vol.2, 87-94, 2005.

23）吉武輝子 : やさしさという名の効率主義 , 看護 , 41:3, 26-30, 1989.

24）中西睦子：優しさの力学 , 看護 , 41: 3-38, 1989.

25）亀山美智子：やさしさへの志向と幻想を考える , 看護 , 41:3, 44-49, 1989.

26）土屋由美：看護現場で求められるコミュニケーション　その視点と実際　＜正しさ＞＜やさしさ＞の使い方　医療職者のコミュニケーションについて考える，看護実践の科学 , 34:5, 6-12, 2009.

27）佐々木祥子 :「やさしい医療」「やさしい看護」とは？看護師の立場から考える，子供の健康科学，21（1），17-21，2021.

28）橋本知子：看護婦 - 患者の専門的援助関係 看護婦の「やさしさ」その 1, 足利短期大学紀要 ,vol15, 67-77, 1994.

29）橋本知子：看護婦 - 患者の専門的援助関係 看護婦の「やさしさ」その 2, 足利短期大学紀要 , vol15, 79-83, 1994.

30）豊島幸子 , 橋本知子 , 松本明美 : 看護師 - 患者の専門的援助関係における「やさしさ」の捉えと意識の研究 , 足利大学看護学研究紀要 , 8:1, 1-13, 2020.

31）大谷和代 , 木村久美子 : やさしさと思いやりの育成職業的能力としてのやさしさの育成看護学生のやさしさ概念と行動についての調査からの

一考察 , 看護教育 , 36:5, 405-410, 1995.
32）大谷和代 , 木村久美子 : やさしさと思いやりの育成職業的能力としてのやさしさの育成（2）臨床実習を通して看護学氏のやさしさがどのように変化したか , 看護教育 , 37:8, 652-657, 1996.
33）笠松由佳．患者が認知する「やさしさ」を成立させる看護の構造化．聖路加看護大学大学院看護学研究科学修士論文．2008.
34）山屋文枝 , 齋藤るり子 , 遠藤直子他 : 患者が知覚する看護師のやさしさと思いやり , 日本看護学会論文集 : 看護管理 , 看護教育 , 51 回 , 32-35, 2021,
35）橋本寛敏ら：高等看護学講座 2 看護倫理・看護史 , 医学書院 , 21, 1952, 東京 .
36）湯槇ますら：系統看護学講座 看護学総論 , 医学書院 , 43, 1975, 東京 .
37）波多野梗子ら：系統看護学講座／専門分野 1 ／基礎看護学 1 ／看護学概論　第 13 版，医学書院 , 143, 2001, 東京 .
38）藤崎郁ら：系統看護学講座／専門分野／基礎看護学 1 ／看護学概論　第 14 版，医学書院 , 1, 2006, 東京 .
39）茂野香おるら：系統看護学講座／専門分野／基礎看護学 1 ／看護学概論　第 15 版，医学書院 , 2, 2012, 東京 .
40）茂野香おるら：系統看護学講座／専門分野／基礎看護学 1 ／看護学概論　第 15 版，医学書院 , はしがき 1, 2012, 東京 .
41）茂野香おるら：系統看護学講座／専門分野／基礎看護学 1 ／看護学概論　第 16 版，医学書院 , 2, 2016, 東京 .
42）茂野香おるら：系統看護学講座／専門分野／基礎看護学 1 ／看護学概論　第 17 版，医学書院 , 2, 2020, 東京 .
43）茂野香おるら：系統看護学講座／専門分野／基礎看護学 1 ／看護学概論　第 17 版，医学書院 , 8, 2020, 東京 .
44）岩井郁子ら；系統看護学講座 / 専門 3 / 基礎看護学 3 / 臨床看護総論　第 2 版 , 医学書院 . 1, 1993, 東京 .
45）岩井郁子ら；系統看護学講座 / 専門 3 / 基礎看護学 3 / 臨床看護総論　第 1 版 , 医学書院 , 64, 1990, 東京 .
46）岩井郁子ら；系統看護学講座 / 専門 3 / 基礎看護学 3 / 臨床看護総論　第 2 版 , 医学書院 , 85, 1993, 東京 .
47）岩井郁子ら；系統看護学講座 / 専門 3 / 基礎看護学 3 / 臨床看護総論　第 3 版 , 医学書院 , 86, 1997, 東京 .
48）岩井郁子ら；系統看護学講座 / 専門 3 / 基礎看護学 3 / 臨床看護総論　第 2 版 , 医学書院 . 148, 1993, 東京 .
49）岩井郁子ら；系統看護学講座 / 専門 3 / 基礎看護学 3 / 臨床看護総論　第 3 版 , 医学書院 , 161, 1997, 東京 .
50）岩井郁子ら；系統看護学講座 / 別巻１７ / 臨床看護総論　第 4 版 , 医学書院 , 161. 2006, 東京 .
51）前田清子 : 痛みの記録 , 日本看護協会出版会, 168, 1990, 東京 .
52）岩井郁子ら；系統看護学講座 / 専門 3 / 基礎看護学 3 / 臨床看護総論 第 2 版 , 医学書院 , 148, 1993, 東京 .
53）岩井郁子ら；系統看護学講座 / 専門 3 / 基礎看護学 3 / 臨床看護総論　第 3 版 , 医学書院 , 161, 1997, 東京 .
54）岩井郁子ら；系統看護学講座 / 別巻１７ / 臨床看護総論　第 4 版 , 医学書院 , 161, 2006,　東京 .
55）香春知永ら；系統看護学講座 / 専門分野Ｉ / 臨床看護総論　第 5 版 , 医学書院 , 115, 2012, 東京 .
56）香春知永ら；系統看護学講座 / 専門分野Ｉ / 臨床看護総論　第 6 版 , 医学書院 , 115, 2016, 東京 .
57）香春知永ら；系統看護学講座 / 専門分野 / 基礎看護学 4 / 臨床看護総論　第 7 版 , 医学書院 , 87, 2022, 東京 .
58）榎本博明 :「やさしさ」過剰社会　人を傷つけてはいけないのか , PHP 新書 , 2016, 東京 .
59）大平健 ：やさしさの精神病理 , 岩波新書 , 1995, 東京 .
60）栗原彬:やさしさの存在証明. 新潮社, 1996, 東京.
61）柳澤桂子：愛されて生きる，岩波書店，137,170,172, 1988,　東京.
62）仁志田博司 : 新生児医療　子どもの心を育む医療　やさしさの源泉を求めて , 助産婦雑誌 , vol. 56, 255-260, 2002.
63）仁志田博司 : 共に生きるあたたかい心の根源 母と子の医療から学んだこと , 日本母乳哺育学会雑誌 , 10:1, 41-44, 2016.
64）榎本博明 :「やさしさ」過剰社会　人を傷つけてはいけないのか , PHP 新書 , 2016, 東京 .
65）ミントン・メイヤロフ / 田村真・向野宜之訳 :

ケアの本質　生きることの意味，ゆるみ出版，18-27，1998，東京.
66）榎本博明：「やさしさ」過剰社会　人を傷つけてはいけないのか , PHP 新書 , 2016, 東京 .
67）竹内整一:「やさしさ」と日本人　日本精神史入門，ちくま学芸文庫 , 45-175, 2016, 東京 .
68）栗原彬：やさしさの存在証明 . 新潮社 , 297-317, 1996, 東京 .
69）大平健 ：やさしさの精神病理 , 岩波新書 , 165, 1995, 東京 .
70）栗原彬：やさしさの存在証明 . 新潮社 , 36, 1996, 東京 .
71）ドイツ連邦共和国大使館　総領事館の HP（2022/08/29 閲覧）
https://japan.diplo.de/ja-ja/themen/politik/-/2331262

# Literature Review of " Yasashisa " in Japanese Nursing

WATANABE Kazumi, MINAMI Hiroko, YAMAOKA Yumi

key words: Kindness, Tenderness, Nursing, Literature Review